

ういろうり
外郎売

せっしゃおやかた　もう　たちあ　うち　ぞんじ　かた
拙者親方と申すは、お立合いの中にご存知のお方もござりましようが、お江戸を発って

にじゅうりかみがた　そうしゅうおだわら　いっしきまち　す　あおもちのちよう　のぼ
二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへおいでなされるれば、

らんかんばしとらや　とう　えもん　ただいま　ていはつ　えんさい　な　の
欄干橋虎屋藤右衛門、只今は剃髪いたして円齋と名乗りまする。

がんちよう　おおつごもり　て　くすり　むかし　ちん　くに　とうじんういろう
元朝より大晦日までお手に入れまするこの薬は、昔、陳の国の唐人外郎という人、

ちよう　き　みかど　さんだい　おり　くすり　ふか　こ　お　もち　とき　いちりゆう
わが朝へ来たり、帝へ参内の折からこの薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ

かんむり　すきま　と　いだ　よ　な　みかど　とうちんこう　すなわ　もんじ
冠の隙間より取り出す。依ってその名を帝より「透頂香」とたまわる。即ち文字に

は「頂き、透く、香い」と書いて「とうちん香」と申す。

ただいま　くすり　こと　ほかせじよう　ひろ　ほうぼう　にせかんばん　い　おだわら　はいだわら
只今はこの薬、殊の外世上に弘まり、方々に偽看板を出だし、イヤ小田原の、灰俵の、

だわら　すみだわら　もう　ひらがな　しる　おやかた
さん俵の、炭俵のといろいろに申せども、平仮名をもって「ういろう」と記せしは親方

えんさい　たちあ　うち　あたみ　とう　さわ　とうじ　また　い　せ
円齋ばかり。もしやお立合いの中に熱海か塔の沢へ湯治においでなされるか、又は伊勢

ごさんぐう　おり　かなら　かどちが　のぼ　みぎ　かた　くだ
御参宮の折からは、必ず門違いなされまするな。お登りならば右の方、お下りなれば

ひだりがわ　はっぼう　や　むね　み　むね　ぎよくどうづく　は　ふ　きく　きり　ごもん
左側、八方が八つ棟、おもてが三つ棟、玉堂造り、破風には菊に桐のとうの御紋を

ごしゃめん　けいずただ　くすり
御赦免あつて、系図正しき薬でござる。

さいぜん　かめい　じまん　もう　ぞんじ　かた　しょうじん　こしょう　まるの
イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、ご存知ない方には、正身の胡椒の丸呑み、

しらかわよふね　いちりゆうた　き　み　あ　め　ま　くすり
白河夜船、さらば一粒食べかけて、その気味合いをお目にかけてましよう。先ずこの薬

をかように　いちりゆうした　うえ　ふくない　おさ　い　い
をかように一粒舌の上へのせまして腹内へ納めますると、イヤどうも言えぬわ、胃・

しん　はい　かん　くんぼうのんど　き　こうちゅう　びりよう　しょう　ごと　ぎよ
心・肺・肝がすこやかになりて薫風喉より来たり、口中微涼を生ずるが如し。魚・

ちよう　きのこ　めんるい　く　あ　ほかまんびようそっこう　かみ　ごと
鳥・茸・麺類の食い合わせ、その外万病速効あること神の如し。

さてこの薬、第一の奇妙には、舌のまわることが銭独樂がはだして逃げる。ひょっと

した　だ　や　たて
舌がまわり出すと、矢も盾もたまらぬじゃ。そりゃそりゃ、そらそりゃ、まわってきた

わ、まわってくるわ。アワヤ候サタラナ舌に、か牙サ歯音、ハマの二つは唇の軽重、

かいごう
開合さわやかに、アカサタナハマヤラワ、オコソトノホモヨロワ。一つへぎへぎに、へ

ほ　ぼんまめ　ぼんごめ　ぼん　つ　たて　まめ　ざんしょ　しょしゃざん　しゃそうじよう
ぎ干しはじかみ。盆豆、盆米、盆ごぼう。摘み蓼、つみ豆、つみ山椒。書写山の社僧正。

こごめ　こごめ　こごめ　こなま　しゆす　しゆす　しゆす　しゆちん
粉米のなまがみ、粉米のなまがみ、こん粉米の小生がみ。繻子、ひじゆす、繻子、繻珍。

おや　か　へい　こ　か　へい　ふるくり　き　ふるきりくち
親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親かへい子かへい、子かへい親かへい。古栗の木の子古切口。

あまがっぱ　ばんがっぱ　きさま　かわきやはん　われら　かわきやはん　かわばかま
雨合羽か番合羽か。貴様のきやはんも皮脚絆、我等がきやはんも皮脚絆。しっ皮袴の

しっぽころびを三針はり長にちよと縫うて、縫うてちよとぶんだせ。河原撫子、野石竹。

にょらい　にょらい　み　にょらい　む　にょらい　ちよとさき　こぼとけ
のら如来、のら如来、三のら如来に、六のら如来。一寸先のお小仏に、おけつまずきや

るな。細溝にどじよによろり。京の生鱈、奈良生まな鯉、ちよと四五貫目。お茶立ち

よ茶たちよちやつと立ちよ茶立ちよ、青竹茶せんでお茶ちやと立ちや。

来るは来るは何が来る、高野の山のおこけら小僧。狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒

八百本。武具馬具ぶぐばぐ三ぶぐばぐ、合わせて武具馬具六ぶぐばぐ。菊栗きくくり

三菊栗、合わせて菊栗六菊栗。麦ごみむぎごみ三むぎごみ、合わせてむぎごみ六むぎご

み。あの長押の長薙刀は誰が長薙刀ぞ。向こうの胡麻がらは荏のごまがらか真ごまがら

か、あれこそほんの真胡麻殻。がらびいがらびい風車。おきやがれこぼし、おきやが

れ小法師、ゆんべもこぼして、又こぼした。たあぶぼぼ、たあぶぼぼ、ちりからちりか

らつったつぽ。たつぽたつぽ干だこ落ちたら煮て食お、煮ても焼いても食われぬ物は、

五徳鉄弓かな熊童子に、石熊石持ち、虎熊虎きす、中にも東寺の羅生門には、茨木童子

がうで栗五合、つかんでお蒸しやる、彼の頼光の膝元去らず。

鮎、金柑、椎茸、さだめて後段な、そば切りそうめん、うどんか愚鈍な小新発知。小棚

のこ下のご桶にご味噌がこ有るぞ、小杓子こ持ってこ掬ってこよこせ、おっと合点だ

心得たんぼの川崎、神奈川、程が谷、戸塚は走っていけば灸を摺りむく、三里ばかり

か藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして、早天早々、相州小田原とうち

ん香、隠れござらぬ貴賤群衆の花のお江戸の花ういろう、アレあの花を見てお心をお

やわらぎゃつという産子這う子に至るまで、この外郎の御評判、御存知ないとは申され

まい、まいつぶり角出せ、棒出せ、ぼうぼうまゆに、白、杵、すりばち、ばちばちぐわら

ぐわらぐわらと羽目を外して今日お出の何れも様に、上げねばならぬ、売らねばならぬ

と息勢引っぱり、東方世界の薬の元締め、薬師如来も照覧あれと、ホホ敬って、う

いろうはいらっしゃりませぬか。

大江山の鬼退治

大江山を拠点に京都を荒らす鬼・酒呑童子の一味(茨木童子のほか、四天王と呼ばれる石熊

童子、虎熊童子、星熊童子、金熊童子)を退治しようと、源頼光と配下の“頼光四天王”

(渡辺綱、坂田金時、碓井貞光、卜部季武)らが討伐隊を結成、大江山に向かった。うまく酒

に酔わせて鬼たちを退治したが、茨木童子だけは取り逃した。

その後、「羅生門に近頃鬼が出る」との噂を聞いて出かけてきた渡辺綱の前に茨木童子が現れ

た。鬼は綱に斬り落とされた腕を七日後に奪い返しにきた後、行方が知れない。